

〈論文〉

中学生対象の被服製作指導力向上を目指した映像教材の開発と検証 —アイディアバッグコンクールを素材とした試み—

福田典子 信州大学学術研究院教育学系

高井 久 上田市立第三中学校

勝山こころ 長野県長野養護学校

Developing Teaching Materials to Increase Motivation of Home Economics Teacher Training Course Students: An Experiment Using a Video of a Junior High School Bag Sewing Competition

FUKUDA Noriko: Institute of Education, Shinshu University

TAKAI Hisashi: Daisan Junior High School, Ueda City

KATSUYAMA Kokoro: Nagano Special School, Nagano Prefecture

The aim of this research was to develop teaching materials for home economics teacher training course students that would raise curiosity and motivation about teaching bag sewing to junior high school students. Digital teaching material was created using a video of a junior high school bag sewing competition. An experimental lesson using the digital material was conducted. Free description analysis after the lesson suggested that the home economics teacher training course students could feel how hard the junior high school students worked for the competition. The confidence and learning motivation of the home economics students were found to have increased. In addition, the efficiency analysis of twenty-two teachers after the viewing suggested that this video could increase the understanding of competition. Eighty-six percent of teachers evaluated the teaching material as useful.

【キーワード】 被服製作指導力 映像教材 アイディアバッグコンクール 開発 検証

1. はじめに

小・中・高校家庭科衣生活領域における被服製作学習に関して児童生徒の学習実態や製作意識(野々村 1992)や大学生の被服製作に関する技能習得,日常生活における手縫い実践率,学習意識について多方面から調査され,その実態が明らかにされている.大学生に関しては家政系大学生の調査(高部 1994,布施谷 2001, 2003)および教育系大学生の調査(鮎田 1993,奥村 1987,速水 2014)が知られる.中・高家庭科教員を対象とした実態や意識(近藤 2004,

広瀬 1992) も報告されている。

小学生において、小6児は小5児に比べて自信を失う傾向が認められ、学習意欲が減衰する(堀内 1991)。小6児であっても目標設定や導入段階で自信を持たせ、学習意欲を高めることが期待される(岡田 2001)。高校生において、男子は女子よりも技能向上幅が大きく、生徒が学習後に達成感をより大きく感じている(香川 2000)。題材選定は非常に重要であるが、小・中・高校の題材重複が多い点(布施谷 2001)や題材難易度が高いほど成就(完成)率が低下する点が課題とされる。家庭科では、既習内容を各家庭の生活課題に応じて、応用発展・適応させて児童生徒の個別の家庭生活における主体的で自立的な実践を最終的な目標としている。授業内の製作経験が日常生活における衣類修繕等の実践に結びついていない(布施谷 2001)ことも指摘される。大学生の生育環境の違いに注目した調査によると、家族の縫製頻度が学生の学習への取り組み意欲に影響を与える(高部 1994, 布施谷 2003)とされる。近年、家庭内のミシンやアイロンの保有率は低下し、家族の縫製頻度は低下傾向で、被服製作の導入段階の困難さも課題の1つと指摘される。

家政系学生は被服製作に対して学習意欲や興味はあるが、被服製作を自分自身が取り組むことに対しては自信なく不安を感じており(柴田 2017)、不安の解消が何よりも学生にとって必要とされる(高部 1994)。一方、教育系学生の被服製作技能を向上させるためには大学の授業科目だけでは不十分であり、学外における体験学習や課外活動へ発展させるべき(奥村 1987)との指摘がある。運針技能の習熟指導は、拇指長に適した手縫い針の選定が重要であり、男性は女性に比べ拇指長の個人差が大きいことや運針技能習得に性差は認められない(鮎田 1983)と縫製技能習得に関する報告もある。しかし縫製技能習得の教育的意義が生活自立から趣味や生活の豊かさや潤いの充実へ変化しており(中間 1985)家庭科指導者により被服製作学習の教育的意義の捉え方が多様である(鈴木 1989)という課題も報告されている。

以上の被服製作学習指導の実態や課題を踏まえ、実践的な被服製作指導力を育成するための教員養成カリキュラムや授業の必要性を確認できた。学生の中には、家庭や学校内外での被服製作経験が多くはなく、その教育的意義や指導に対するイメージが不足している者も多く、自身の製作技能および製作指導力に不安を持つ者も多い。体育系、音楽系、美術系学生は入学時より技能に対する意識も高く、学生自身の技能に対して一定レベル以上の自信を有しており、実感を伴って活動に含まれる個人的成長を既に獲得しておりその教育的意義を自分なりに理解している学生が多い。しかし、家庭科の学生は、その点が欠落しているケースが多い。そこで、製作技能習得に対する教育的意義や指導力向上への動機付けが何よりも必要ではないかと考えた。

そこで本研究では、教員養成課程の学生向きの映像教材を開発し、その検証を行った。ここでは視聴による学生の家庭科指導者としての意識の高まりを検証するとともに、本教材の教育的意義や改善点を明らかにした。本教材開発にあたり競技大会参観よりも時間や場所の制約が少なく、映像提示と併用した対面解説、データの授受やデータ貸出、保管が簡便であり、繰り返しの視聴も可能なデジタル教材の特性にも注目した。

2. 方法

2.1 映像教材の開発および活用効果の検証例

教員養成課程に在籍する学生の指導力向上を目的とした映像教材の活用例としては、授業設計の技能向上を目的とする板書や説明などの教授技術に関する具体的なものや授業評価の技能を向上させるものが知られている。

小学校体育の指導力向上への映像教材効果について①授業に対する興味・関心②授業の仕組み理解③授業における人間関係の理解促進が報告（赤堀 1994）されている。学習指導要領改訂周知のため柔道指導教材を開発し（高橋 2013）、教師が指導内容を明確にイメージし、安全確保や技能定着に向けた指導の見通しを持つ効果が予想されている。また、生徒も学習中の集中力向上、主体的な学習の場の提供等の点で映像教材への期待が示されている。開発映像教材の生徒への提示により、教師にとってはよりの確かなアドバイスを与えることができ、指導における不安軽減に繋がり、生徒にとっては柔道学習に対する不安感や恐怖心も軽減する効果が予測されている。小学校音楽のリコーダー演奏技能習得（佐藤 2016）を目的とした映像教材開発例が報告されている。中学校英語において外国映画を教材として活用し、生徒の有能感やリスニング力向上効果が報告されている。理容・美容系専門学校生の英語学習（染谷 2016）においても、市販映像教材は内発的動機付けを高め、授業を肯定的に捉える傾向が報告されている。水産高校において熟練教員の師範を素材とした映像教材を開発し（加藤 2019）、対面・集団学習指導法と映像教材を活用した自学自習法を比較し、生徒の操作習得レベルに差のないことが報告されている。水産海洋技術習得において、映像教材を活用した自学自習法では、対面・集団学習指導法に比べ自立的学習姿勢を向上させることも指摘されている。

これまでの映像教材開発の主なコンセプトは、主として知識や技能などの指導内容を映像化することにより、できるだけ正確に効率的に伝える内容伝達としていた。しかしながら、今回の 2017 学習指導要領の改訂では、学習内容の狭義な知識や技能の伝達ではなく、新しい学力観として判断力・思考力の育成や対象に対する好奇心や探求心の向上や、知識・技能の活用力の育成が求められている。インドネシアの教師対象に理科の映像教材の有効性を検証した実践（竹内ら 2013）は知識習得型でない科学的思考力育成に質する授業を作り出す可能性がある」と指摘している。また、大学生の初年次対象に物理実験の映像教材を制作し有効性を検証した実践（鳥居 2006）は、難しい理論の説明や数式の理解を求めるには不向きであるが、イメージや概念を強い印象とともに伝えるためには視聴覚教材は有効であると指摘している。教員養成課程の学生指導においても、学生自身に気付かせるという新たな視点を取り入れた指導計画の作成が重要である。指導内容や指導技術などの学習対象に対する学生の興味・関心を引き出すことや、学生の個別のこれまでの体験や学生固有の見方や考え方を尊重し、それらを生かした多様な学びの保証と、学生独自の指導者への自覚を引き出すための工夫が一層必要ではないかと考えた。またこれまで、幼小中教員養成課程の学生は、教育実習前の事前学習として現職教師の授業を参観し、指導および児童生徒の授業への参加状況を観察することが多い。しかしながら、多くの場合、参観の視点が未熟であることや、授業を指導者の視点で観察する経験が不

足しているために学生によっては、必ずしも十分に学習者や指導者の理解に到達できない場合も多く見受けられた。

そこで、本研究では中学生のアイデアバッグコンクールでの競技の様子を素材と選定した。指導内容の狭義の伝達とオープンな参観の課題を解決する新しい映像教材として、生徒の課題に取り組む様子が学生に情動的な感動をもたらし、それを支える指導者の姿を予想し、間接的に自らの姿勢を正す教育的効果を高めることを狙った。表1に映像教材開発の構想段階で注目した3つの視点について学生に印象づけたい知識・技能と関心・意欲に分けて示した。

2.2 映像教材開発

映像教材の主な狙いは、3点であった。視聴した学生が中学生のための全国ものづくり競技会の存在を知り、生徒が競技に集中する姿を観察することにより、中学校家庭科指導者としての指導意欲を高め、実践的な指導力向上への意識づけを目的とした。表1に教材制作を構想する際にポイントとした視点をまとめて示した。

表1 映像教材開発の構想段階で注目した視点

| 視点 | 学生に印象づけたい知識・理解 | 学生に持たせたい関心・意欲 |
|-------|---|--|
| 大会認知 | <ul style="list-style-type: none"> ・競技会ルールの概要を知る ・実際の競技の様子がわかる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・競技会に関する情報を収集したいという関心や意欲を高めることができる。 |
| 生徒理解 | <ul style="list-style-type: none"> ・競技会に参加する生徒の製作技能レベル、生徒の製作に関する知識レベル、生徒の競技会に挑むまでの思いや努力を予測する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の能力差、生徒の作品の多様性、生徒の作品へのこだわりに関心を持つ。 |
| 指導者理解 | <ul style="list-style-type: none"> ・好成绩を残すためには適切な指導が必要となることかわかる。 ・生徒の個性を生かし、個別の願いに応じる指導には個別の対応が必要となることかわかる。 ・指導者自身の知識・技能レベルの向上や日々の研鑽について考えることができる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・指導者間の指導力の差に関心を持つ。指導者としての自分自身の指導意欲を高める。指導者として、競技に参加する生徒の指導に関心を高めるとともに、自分の担当する生徒に好成绩を残して欲しいという感情を抱く |

2017年10月M市立S中学校被服実習室にて実施された競技会の様子を収録した。競技時間3時間（午前2時間、午後1時間）の選手（生徒）の様子を映像素材として収録した。すべての競技は被服実習室で行われた。競技に参加する生徒は裁断と印付けを終了した段階からの工程が審査対象となるため、縫製開始から完成までの競技の様子を収録した。収録の前に専門業者のカメラマンに教材制作意図の説明を行い、抽出生徒、収録時の配慮等に関して、入念な打ち合わせを行った。事前に競技大会実行委員長、アイデアバッグ部門長に教材作成の趣旨および制作動画教材の活用場面の計画等を説明し、撮影の承諾を得た。生徒、保護者、指導教諭に対しても事前に撮影目的を伝え、撮影の許諾を得た。映像は生徒の手の動きやミシンやアイロン等の機器操作の様子を中心に、競技中の生徒が特定されないように配慮した。競技参加者に撮影が精神的な影響を与えないように配慮した。保護者の参観は許可せず、会場入場は中学校ごとに引率および指導者の家庭科教員1名のみが許可された。表2に映像教材の制作工程を企画・監修者と専門業者に分けて示した。全工程は3つから構成された。1段階は素材収録、2段階は必要動画映像の抽出と文字情報の挿入であった。3段階は、不要画像情報の削除や映像に映り込んだ肖像権に配慮した画像処理等（我妻 2016）であった。

表2 映像教材の制作工程と協働連携

| 工程 | 企画・監修者 | 撮影・編集専門家 |
|-------------------|--|---|
| 映像素材の収録 | <ul style="list-style-type: none"> ・競技大会主催者より映像素材収録の許諾を得る. ・企画に関する予算を得る. | <ul style="list-style-type: none"> ・日程調整と機材調整をする. |
| 必要動画映像の抽出と文字情報の挿入 | <ul style="list-style-type: none"> ・効果的な動画映像部分を抽出する.・効果的な静止画を選定する.・効果的な文字情報を校閲する. | <ul style="list-style-type: none"> ・動画映像を編集する.・静止画を編集する. ・文字列を挿入する. |
| 不要画像情報の削除、肖像権配慮 | <ul style="list-style-type: none"> ・個人が特定される画像情報削除の依頼をする ・その他肖像権への配慮事項を検討する. | <ul style="list-style-type: none"> ・依頼事項に関して処理する・教材効果を高めるための好ましい画像処理に関して提案する. ・教材効果を高めるための好ましい音声挿入に関して提案する. |

2.3 開発映像教材の検証

開発した映像教材の有効性を検証するとともに改善点を明らかにすることを目的として、教員養成課程所属学生および現職技術・家庭科教師を対象として配票調査を行った。

学生調査は、2018年7月24日（火）S大学教育学部にて「中等家庭科指導法基礎Ⅰ」において実施した。対象はS大学教育学部学校教育教員養成課程に在籍する家庭科教育コース2年次16名および中学校家庭科免許取得を希望している他教科コース3・4年次学生5名の合計21名であり、全員が女性であった。2年次学生は公立小学校での1週間の参観実習を経験していたが、教育実習は未経験であった。3・4年次学生の一部は小学校または中学校における教育実習経験者であった。開発動画教材の提示に先立って、中学校技術・家庭科家庭分野衣生活領域における生活に役立つものづくりの指導目標、指導内容、具体的な教材例、指導上の留意点等を解説した。その後、授業における家庭科指導で習得した知識技能の発展的な生徒の活躍の場として、ものづくり競技大会の事例を紹介した。学生は全員で1つのスクリーンにプロジェクターから映される映像を同時視聴した。視聴後に競技大会・被服製作指導に対する個別の考えについて自由記述で回答を得た。現職技術・家庭科教師調査は、2019年5月24日（金）N県技術・家庭科研究会全県大会において実施した。対象はN県において技術・家庭科教育に関心の高い小・中学校教員、男性1名、女性21名、合計22名であった。教員の年齢および教員経験年数を図1に示した。50代が最も多く全体の41%であり、経験年数は30年以上が最も多く全体の23%であった。調査は、ものづくりアイデアバッグコンクールへの興味・関心について4項目、映像教材の教育効果について4項目、生徒にとっての製作体験の教育的な意義につ

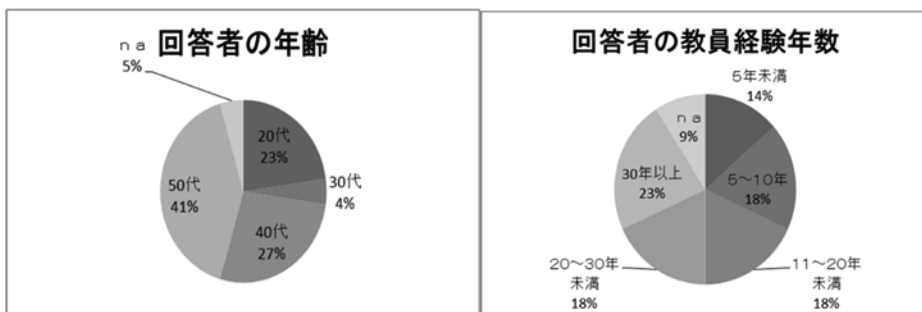


図1 技術・家庭科教員の調査対象

いて3項目とした。1点(全く思わない)、2点(思わない)、3点(どちらともいえない)、4点(そう思う)、5点(とてもそう思う)、の5件法で回答を得た。

3. 結果と考察

3.1 学生対象調査から得られた視聴後意識

自由記述を1内容1件として集計し、大会認知、生徒理解、教師理解に分類整理した。表3、図2に結果を示した。学生21名より得られた80件を分析対象とした。映像教材では主として生徒の作業の映像であったが教師としての指導性に気づき、教師理解に関する内容が全体の25%出現していたことは、本教材が学生の家庭科教師としての視点を引き出すことに影響を与え、指導者の観点で映像を視聴できていたことを実証できた。

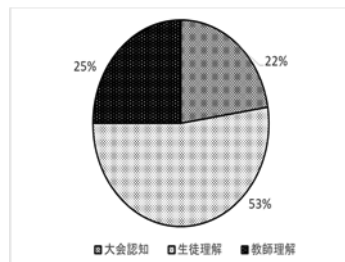


図2 視聴後の学生の自由記述

学生の自由記述には、大会認知に関しては、「初めて知った」とされるものが最も多く4件回答された。また、生徒理解に関しては、「(中学生の技能が)すごい、驚いた」が最も多く20件回答された。教師理解に関しては「子どもの能力を向上させる」授業づくりがしたい」が最も多く6件、「教師は生徒の技能を超えなければいけない」が3件回答された。

3.2 教員対象調査から得られた映像教材に対する評価

開発した映像教材視聴後の現職教員の意識を図3に示した。競技の様子や会場の雰囲気の理解に役立つという点に対して、「とてもそう思う」41%、「そう思う」45%であり、合計現職教員の86%が肯定的な評価を示した。このことから約9割の技術・家庭科教員が視聴後に、教材効果を評価したことが明らかとなった。さらに視聴後の教員のものづくり大会への関心・意欲・態度を明らかにするために、4つの意識について回答を得た。意識得点の平均値に関して「大会を見学したい」は4.38と最も高い得点が得られた。「競技の詳細を知りたい」は4.00が得られた。これらの結果から、開発映像の視聴は、教員の製作競技(ものづくり)大会への関心を高め、見学や関連情報の収集への動機づけになるものと推察された。その他の「生徒を競技に参加させたい」は3.88、「生徒にものづくり大会を見学させたい」は3.88と、いずれも肯定的意識として回答された。さらに、映像教材視聴後にN市内の公立中学校に勤務する家庭科教員2名より借用依頼があり、貸出に応じた。家庭科教員は、自身が繰り返し視聴することにより指導計画作成の基礎情報とするとともに勤務校の家庭科部に所属する生徒に視聴させ、大会の説明教材として利用したものと推察される。現職技術・家庭科教員の自由記述の一例を表4に示した。この記述内容より、本映像教材の視聴により、家庭科教育の目的を再確認した様子が伺えた。

表3 視聴後の学生の自由記述

| | 内容 | 件数 (件) | 割合 (%) |
|--------------------------------------|--|-----------------------|-----------|
| 大会認知 | (このような大会があることを) 初めて知った | 4 | |
| | (このような大会があることを) 知れてよかった | 4 | |
| | 大会を実際に見学したい | 2 | |
| | 興味ある子どもがより深く追求できる機会を与えることになる | 1 | |
| | ハードな戦いだ | 1 | |
| | 大会のおもしろさと難しさを感じた | 1 | |
| | 完成した作品や設計図やスピーチも見たい | 1 | |
| | 普段の生活や普通の学校での学びを生かした非常におもしろい取り組みだ | 1 | |
| | このビデオ教材を小中学生に見せたい | 1 | |
| | 大会では、スナッフ(つけ)やDカン(つけ)などのいろいろな技能が試されていることを知った | 1 | |
| | 目的を持って創造的に独自性のある作品を作り上げることの素晴らしさや意義を感じた | 1 | |
| | | 18 | 22 |
| | 生徒理解 | (中学生なのに技能レベルが)すごい、驚いた | 20 |
| 沢山練習して参加していることがわかった | | 7 | |
| 生徒は(自分の)特技に気づき、自身がつく | | 3 | |
| 丁寧に(考えて)作っていることが伝わってきた | | 2 | |
| 生徒は(この技能を)将来の生活に役立てることができる | | 1 | |
| この大会に参加して、ものづくりで活躍できる生徒が増えると思う | | 1 | |
| 自分は裁縫が得意だったり、好きだと気付いてくれる子どもがいるかもしれない | | 1 | |
| 集中している生徒の姿が美しい | | 1 | |
| (参加者が)女子だけなのが残念だ | | 1 | |
| 一人一人の作品が異なり大事にしたいことが明確なんだろう | | 1 | |
| 家庭科が好きな子たちであることが伝わってきた | | 1 | |
| ものづくりの好きな生徒がいることを知って嬉しかった | | 1 | |
| 今の中学生のレベルや考え方を知りたい | | 1 | |
| 新しい技とかポイントがわかれば、自然に技術が身についていくと思う | 1 | | |
| | 42 | 53 | |
| 教師理解 | このような子どもたちの興味を大切に、このような能力を向上させるような授業づくりがしたい | 6 | |
| | 教師は生徒の技能を超えなければいけない | 3 | |
| | 知識と技術を持って対応できるようになりたい | 2 | |
| | どのような指導をすればここまでできる生徒になるのか興味深い | 1 | |
| | 工夫できて、作っただけで終わらない製作実習をしたい | 1 | |
| | 子どものやりたいという気持ちを大切にしたい | 1 | |
| | 苦手な子も楽しめる授業づくりを考えたい | 1 | |
| | 製作指導にどのような動機づけをしていけるかを考えたい | 1 | |
| | (技術だけでなく)作品づくりの楽しさを教えてあげたい | 1 | |
| | 製作は基本が大切 | 1 | |
| | 子どもたちに係る人間を目指す身として責任を感じる | 1 | |
| | このような大会に参加する子どもたちに形だけでなく、強度や実用性についてもしっかり教えたい | 1 | |
| | | 20 | 25 |

(N=21)

表4 視聴後の家庭科教員の評価(自由記述例)

手慣れた手つきでミシンを操作する生徒の姿から、きっと大会に向けて何度も何度もバッグを試作しては改良し、いくつものバッグを作った背景が想像できました。大会に出場することが目的ではあるものの、その過程での誰かのためを思う気持ちや身近な人との繋がりが、この大会の目的の1つであることを感じ取れました。その中で、生徒は技術技能、知識をはじめ、家庭科教育の目的の1つである生きる力を育む事を達成していると感じました。

4. 今後の展望

開発映像教材は、学生の製作競技大会への関心を高め、被服製作学習指導のイメージ作りに役立ち製作技能育成の指導者として製作学習の教育的意義を感得し、指導者としての知識や技

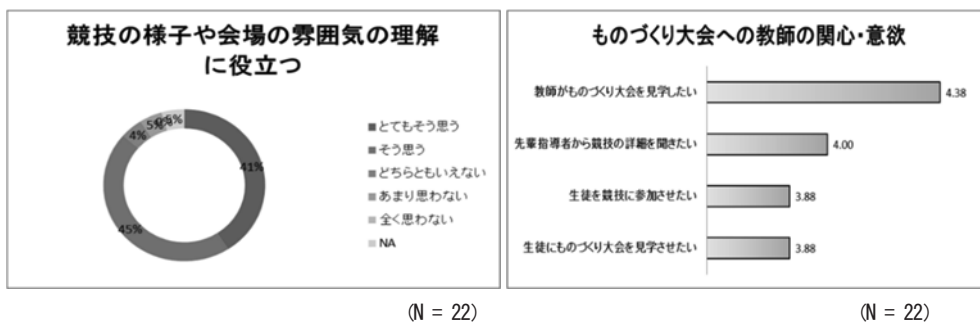


図3 視聴後の映像教材に対する評価と競技会への関心（質問紙）

能習得への意欲を高めることが期待される。学生自身の技能向上の必要意識を再認識し、学生なりの努力を続ける態度の育成に繋がることが期待できる。本教材は、将来家庭科教員を目指す学生の指導力育成のためだけでなく、中学生への大会参加の動機づけや、他教科教員や中学生の保護者や地域の支援者へも競技大会への協力を得る土台づくりに活用できるものと考えられる。本教材に関して、学生から競技者が女子のみで残念だ、教員から時間が長すぎるという指摘があった。今後は、競技への男子生徒の参加者を積極的に育成し、製作は女子という固定的なイメージを払拭できるような映像制作をすることや、映像時間を短くして、より活用し易いものに改善することが必要であるとする。本教材では生徒の競技への取り組みを中心に収録・編集した。競技に参加する生徒を見守る教員の動きのみの映像や競技前後の教員と生徒のコミュニケーションの様子を捉えた映像も教員養成用映像教材として効果的ではないかと気づいたので引き続き開発したい。

5. 結論

本研究では、被服製作の創造性および技能を競う中学生大会の認知を高め、指導者としての自覚を高めることを目的とした映像教材を開発しその効果を検証した。

- 1) 開発した映像教材視聴後の学生の自由記述より、競技会や製作指導に関する関心を高めるとともに指導者としての技能向上への動機付けになることが期待された。
- 2) 開発した映像教材視聴後、現職教員の86%が本教材に対して競技会の理解を促進すると評価したことから、本教材の視聴効果が明らかとなった。
- 3) 開発した映像教材の改善点として、総時間の短縮化や、男子生徒の活躍を印象づけるシーンの必要性などが明らかとなった。

謝辞

素材収録にご配慮賜りました元長野県技術・家庭科研究会会長の吉原慶子氏に、(有) ルックス代表の田中孝和氏に感謝いたします。本研究の一部は2017年度信州大学 e-Learning の映像教材作成プロジェクトの支援により実施しました。平成29年度(2017)全国中学生創造もの

づくり教育フェア長野県大会，豊かな生活を創るアイデアバッグコンクール部門に出場された生徒さん，家庭科教員の方々，競技会主催者，関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

文献

- 赤堀正宜，関根詮明，吉村和昭，山下利之，1994，教師教育における映像教材の教育効果—教育実践力の向上を目指して・体育系と工学系の比較研究—，視聴覚教育研究，24，pp.17-35
- 我妻潤子，2016，映像教材制作時の著作権処理について—素材選び・編集・権利処理の3つの段階より—日本デジタル教科書学会年次大会発表原稿集，5，pp.35-36
- 夫馬 佳代子，太田 壽江，高橋 知子，高橋 春子，1989，家庭における被服教育(第1報)：親の衣生活態度が子に与える影響(家政系の学生の場合)，日本家庭科教育学会誌，32(2)，pp.15-22
- 鮎田 崎子，1983，なみ縫い指導に関する実践的研究—小学校教員養成課程における場合—，日本家庭科教育学会誌，26(1)，pp.67-71
- 布施谷 節子，高部 啓子，2003，家政系女子短大生と母親の被服製作能力と被服製作の必要姓に関する意識と実態，日本家庭科教育学会誌，46(3)，pp.255-264
- 布施谷節子，高部啓子，2001，家政系女子短大生における手縫いの技能の実態—被服製作の知識と過去の経験との関連性—，日本家庭科教育学会誌，43(4)，pp.273-278
- 速水多佳子，黒光貴峰，2014，大学生の家庭科における調理，被服製作の知識・技能の習得状況にみる課題，日本家庭科教育学会誌，57(1)，pp.14-21
- 広瀬月江，太田昌子，家本修，西沢悦子，1992，中学校・高等学校家庭科教員の被服製作指導に対する意識調査—大阪府・徳島県の実態—，日本家庭科教育学会誌，35(3)，pp.23-30
- 堀内かおる，武井洋子，田部井恵美子，1991，家庭科の学習に対する児童の意識(第1報)—被服製作に対する意識—，日本家庭科教育学会誌，34(3)，pp.53-60
- 香川実恵子，2000，高校生の被服製作に関する技術・意識及び効果的な指導法—全国高等学校家庭科被服製作技術検定4級を活用して—，日本家庭科教育学会誌，43(2)，pp.123-129
- 加藤司，永山格，玉城史朗，2019，高校水産教育の技能伝承における映像教材の開発と評価，日本水産学会誌，85(4)，pp.429-437
- 近藤清華，佐藤文子，2004，大学における家庭科教員養成カリキュラムの現状と課題(第1報)—高等学校家庭科教員の教科内容・指導に関する認識・実態—，日本家庭科教育学会誌，47(1)，pp.3-9
- 中間美砂子，別府芳子，山崎万里江，1981，衣生活意識と被服教育のかかわりあいに関する研究(第2報)—中・高校生の意識調査(被服製作領域)—，日本家庭科教育学会誌，24(2)，pp.29-35
- 野々村弘子，高部和子，1992，中学校技術・家庭科における「被服製作」教材の研究(第1報)—態度形成に関する測定尺度の作成と中学生の意識—，日本家庭科教育学会誌，35(2)，pp.33-38
- 岡田みゆき，成田聡子，田部井恵美子，2001，児童の被服製作時間の遅速に及ぼす要因—エブ

- ロン製作における実態及び意識調査から一, 日本家庭科教育学会誌, 43(4), pp.265-272
- 奥村美代子, 1987, 教員養成課程学生の意向調査からみた家庭科の教科課程の課題, 日本家庭科教育学会誌, 30(1), pp.1-6
- 鈴木洋子, 1989, これからの中学校家庭科における被服製作学習・調理実習について—家庭科担当教師の意識—, 日本家庭科教育学会誌, 32(3), pp.9-15
- 柴田優子, 2017, 被服製作への苦手意識とつまずきに対する指導事例, 日本家庭科教育学会誌, 60(3), pp.136-144
- 佐藤和紀, 深見友紀子, 斎藤玲, 森谷直美, 堀田龍也, 2016, 小学校高学年におけるリーダーの演奏技能向上を目指した完全習得型反転学習と評価, 教育システム情報学会誌, 33(4), pp.181-186
- 染谷藤重, 2016, 英語映像教材を用いた授業が英語学習者の動機付けに及ぼす影響—英語学習者の内発的動機に焦点を置いて—, 教材学研究, 27, pp.69-76
- 高部啓子, 布施谷節子, 新留理江子, 高部和子, 1994, 家政系女子大生の被服製作に対する意識と基礎知識(第1報)—製作体験と意識との関連—, 日本家庭科教育学会誌, 37(3), pp.39-46
- 高橋隆太郎, 津谷泰介, 佐藤勝哉, 水戸範之, 2013, 柔道学習指導のための映像教材の開発, 武道学研究, 46 巻, Supplement 号, p.72
- 竹内慎一, 鈴木晴之, 清水欽也, 天花寺宏美, 今尾江美子, 2017, 科学の見方や考え方の育成を目的とした教員向けワークショップと理科映像教材の開発—インドネシア共和国における実践—, 日本科学教育学会年会論文集, 41, pp.37-38
- 鳥居寛之, 2008, 教養課程における物理実験学入門講義のための映像教材の制作(実験室)大学の物理教育, 14(2), pp.76-80

(2020年9月25日 受付)